教会音楽家という仕事

バーバラ・ブルーンズ

Barbara Bruns

岩崎真実子訳

今日はここ横浜のフェリス女学院大学のクワイア・フェスティバル 2018 にお招きいただき、とても嬉しく思います。今朝は早くから長い時間、フェリス女学院と桜美林大学のクワイアと一緒に、明日の夜のフェスティバルの締めくくりとして歌われる 3 曲の合唱作品と讃美歌の練習をしました。後ろのギャラリーにあるすばらしいテイラー エンド ブーディーの オルガンが合唱と讃美歌の伴奏に使われ、フェスティバルの大事な役割を果たします。

明日歌う賛美歌は、林佑子先生の記念として選びました。林先生は今年の 1 月 7 日に 88 歳で亡くなられました。40 年以上ボストンにあるニューイングランド音楽院のオルガン科の教授をされました。みなさんの先生である宮本とも子先生と三浦はつみ先生は、林先生のところで勉強されました。林先生は 1989 年から 1995 年まで、ここフェリス女学院大学の先生としても多くの生徒にオルガンを教えました。今回のフェリスでのクワイア・フェスティバルは、 林先生の記念として捧げたいと思います。

林先生は 1929 年 11 月 2 日に生まれました。林先生のお父さんは聖公会の司祭で横浜の聖アンデレ教会の牧師を永らく務められました。私は林先生と同じように音楽や讃美歌とともに育ちました。私の両親 Helen and Wallace Brownlee は宣教師として、1951 年から 1990 年まで日本に遣わされていました。私は 5 人兄弟の長女として荻窪の衛生病院で生まれました。両親の最初の任地は北海道で、そこに 14 年住んでいました。礼拝や祈祷会、英語のクラス、婦人会などが港町・苫小牧の私の家で行われていました。母はリードオルガンやピアノが手に入るまではアコーディオンで賛美歌の伴奏をしていました。私は 6 歳の時にリードオルガンで讃美歌を弾き始めました。そして 13 歳の時に千歳の米軍基地のチャペルのオルガニストとして、最初の仕事を得ました。ハモンドオルガンでの礼拝の奏楽です！それから東京へ引っ越し三鷹のアメリカンスクールの高校時代に左近和子先生からオルガンを習いました。この時から私は West Tokyo Union Church（ウエスト・トウキョウ・ユニオンチャーチ）のオルガニストにもなりました。オルガニストとして仕事をするにあたり、オルガン曲の準備、聖歌隊や歌手の伴奏、讃美

歌の伴奏の準備に追われました。このためにかなりの練習を必要としましたが、私の時間と働きに対してお金を戴きました。

高校を卒業してからアメリカの大学で音楽教育を専攻しました。生きていくためには、教えることが一番安心だと思ったからです。20 歳の時に大学のオルガンの先生から音楽教育ではなく、オルガン演奏の専攻になるように薦められました。音楽教育とオルガンの二つの専攻で大学を卒業し、オルガン演奏専攻で大学院を卒業しました。この決断は経済的なリスクがあったにもかかわらず後悔はしていません。そして私のキャリアを通して、仕事に値する適正な報酬を得るために頑張ってきました。

プロの教会音楽家として、私は日本で 2 つの教会、アメリカで 8 つの教会で働きました。その中の 6 つの教会は　オルガンを弾くだけではなく、大人と子供の聖歌隊の指導も仕事のうちでした。奏楽曲や聖歌隊で歌う曲の準備だけではなく、教会暦やその聖日に用いられる聖書の箇所から、讃美歌を選ぶことも仕事でした。私の報酬は週給から、オルガニストと聖歌隊指揮者としてフルタイムの年収となりました。アメリカではすべてヴォランティアの聖歌隊が奉仕している教会もありますが、ある教会では 1 人から最大 16 人までの専門の歌い手がソロで歌ったり、ヴォランティアの聖歌隊のパートリーダーになったりしています。専門の歌手がヴォランティアの聖歌隊と一緒に歌うことで彼らに自信を与え、礼拝の質を高めることができます。

教会音楽家が報酬を与えられればそれは評価されたと感じます。礼拝での奏楽が出来るようになるためには、何年ものトレーニングと練習が必要です。個人レッスンは高いし、オルガニストたちはオルガンの練習のためにオルガン使用料を支払わなくてはなりません。日本でも、アメリカでも小さい教会は貧しく、音楽家は礼拝にヴォランティアで奉仕することをしばしば求められます。持っている音楽の才能を分かち合う事は高貴で立派な事です。しかしながら礼拝音楽の質と一貫性は保たれるものでしょうか？教会音楽家や歌い手が報酬を得る事ができれば、礼拝における音楽の捧げものは発展しその質はより良くなります。

礼拝において音楽は言葉と同じように重要です。音楽は聖書の朗読、祈り、神学的思考に光を与えます。有能な音楽家たち、オルガニスト、ピアニスト、楽器演奏者や歌い手が礼拝音楽を選択したりリードしたりすれば、会衆にとって礼拝をより豊かなものにすることができます。

我々の多くは教会音楽家へ報酬を支払う事が教会のすべての会衆がどれだけ多くの恩恵を受けているかを教会の会計担当者が理解しない事を知っています。教会音楽家への報酬の意義についての会話をしている時、担当者はしばしば「オルガニストはお金を支払わなくてもすばらしい演奏をしているじゃない」と言います。このような態度は音楽家を失望させ向上心を失わ

せます。経済的に厳しい教会で音楽家に報酬を支払う事ができなくても少なくともレッスンを受けたり、教育プログラムに 参加する費用は教会が負担すべきです。

アメリカでは、The American Guild of Organists という教会音楽家を養成し、教育する組織があって活発に活動しています。この組織は遠く離れて活動している人や近くに仲間のいない人に連帯感を提供しています。また報酬や契約書のガイドラインがあって教会が音楽家を雇うときにとても役に立っています。教会音楽家の能力は礼拝が豊かになる事によって証明され、そのことは会衆と教会に大きな満足をもたらします。例として教会音楽家が自信を持ってピアノやオルガンで伴奏をすると会衆も一生懸命歌います。人々は賛美する時にきちんとした伴奏があることを知ると躊躇せずに歌います。いきなり伴奏が途絶える事がないことを知っているからです。

1993 年にプリンストン大学で、アメリカのプロフェッショナル教会音楽家たち(私もそのひとりですが)が会合を持ち、教会音楽家として能力を高めたい人たちのために必要な学科の科目を考えました。これは“The Leadership Program for Musicians”と言って経験のある各地の教会音楽家や聖職者から様々なコースの提供を受けました。このような提供が 5 年間に全米で 90 コースとなりました。2 年間のコースで、毎月 1 回土曜日に、6 時間の集中講義があります。

典型的な科目は

「讃美歌とキリスト教会」

「礼拝奏楽」

「会衆への歌唱指導法」

「合唱指揮法」

「新曲の指導法」

「教会音楽家のための情報」

「教会音楽学」

などです。

それ以降このプログラムはウェブサイトやオンラインコース、パワーポイントを使っての発表など多くの教会や才能のある音楽家たちの協力によってさらに発展してきました。たくさんの教会音楽家たちが必要なトレーニングを受け、教会の音楽のリーダーとして働くための自信を与えました。このプログラムは聖職者、音楽家の両方から礼拝で一緒に働くためにもとても

役に立ちました。これはここ日本においても良いモデルとなるのではないでしょうか？

経験の浅い教会音楽家たちは知識や自信を得るために良い指導者や体験プログラムが必要です。私は New England Conservatory を卒業した後、幸運な事に 3 人の素晴らしいボストンの教会音楽家たち Donald Teeters, Edith Ho, and Sally Slade Warner と出会いました。彼らは楽譜や礼拝に関する情報、特別な音楽プログラムや教会暦に合った特別な音楽などを紹介してくださいました。New England Conservatory では得られなかった情報をこれらの素晴らしい音楽家から提供されました。

教会音楽家は上手な演奏家であるだけでなく礼拝についての知識も必要です。アメリカではたくさんの資料や情報が用意されていて教会音楽家に提供されています。教会はまたこれらに関する会議やセミナー講習会に参加する費用を教会音楽家に提供します。このような機会に音楽家がお互いを知り合いまたリフレッシュして教会の音楽のリーダーとしての役割を自覚します。

日本の教会音楽家に強く薦めたい事は良い仲間を見つけることです。そして経験や情報を共有しお互いに助け合うことです。また聖職者や教会員たちには自分の教会の音楽家たちの働きを正しく認識して経済的な援助をして欲しいと思います。ほとんどの教会員は教会音楽家が見えないところでどれだけ時間をかけて準備しているか知らないのです。スポーツ選手が試合に出るために毎日訓練を欠かさないように教会音楽家も毎日の練習でテクニックを磨いたり新しい曲を勉強したりしているのです。ぶっつけ本番では良い仕事は出来ないのです。

私は今までいくつかの教会でオルガニストとしてまた聖歌隊指揮者として仕事をしてきました。そしてこれはとても価値のある仕事だと心から思っています。聖職者と礼拝を計画したり、あらゆる年齢の歌い手や楽器奏者の伴奏をしたり、毎週の礼拝を始め洗礼式、結婚式、お葬式など、人々の人生の大切な場面に関わる大切な仕事です。私は小さい時から、音楽のレッスンを受けさせてくれた両親に、そしてたくさんの素晴らしい先生たち、特に私を音楽家に育ててくださった林佑子先生に、そして私が教会音楽家として創造者である神を讃える特権を与えてくださった神様に心から感謝します。

ソリ　デオ　グロリア　（神にのみ　栄光がありますように）